おばあちゃん達の戦争

小林　芳子（昭和 16 年生まれ）

昭和 16 年 12 月戦争が始まった。私が 1 月に生まれて 11 か月の時でした。父は当時の国鉄職員で通信の仕事をしていたので、すぐには徴兵の赤紙が来なかったと母に聞いています。姉は 2 歳上、弟は 2 年後に生まれました。毎日の生活は電灯をつけても黒い布を巻き、暗くして食事をしました。食事は貧しく、ごはん、味噌汁、魚、野菜に漬物程度でした。それでも時に父は、漬物で 1 杯のみ、子供達を眺めながら、ごきげんな日もありました。

鉄や銅等金属類は没収されました。そんな生活の中で、飛行機の爆音が南葉山の方から聞こえると、ウ～っと空襲警報の大きなサイレンが鳴り響く。すると皆何もかも止めて放り出し家の裏の防空壕に駆け込む。一印魚市場には頑丈なコンクリ製の大きな壕がありました。どこの家の防空壕にも数日分の食糧や大切な物が入っているので、つぶさぬ様に小さくなります。そしてもう 1 度サイレンの鳴るのを、今か今かと待ちます。1 時間位して再びサイレンが鳴り警報解除と皆ホッとして壕を飛び出し笑顔です。毎日この繰り返しでした。

あれは夏の初め頃、ある朝白い木綿のシャツを着て日の丸の旗を手に手に近所の人達が沢山集まってきました。とうとう父さんに赤紙がきたのです。町内会長さんの祝いの言葉に皆辛そうな顔をしています。ばあちゃんと母さんは下を向いて涙をこらえています。子供等は訳わからずキョロキョロしてけげんな顔で皆を見ています。大勢集まってきたので賑やかで嬉しくもありました。高田駅まで父さんを見送りました。父さんの乗った列車が動くと皆バンザイバンザイと旗を振りました。父さんはあえてにこやかに、でも複雑な顔をして家族や皆の顔を代わる代わる見ています。残す家族の心配とこの先の自分の行先の不安が心をよぎります。帰りはもうばあちゃんも母さんも誰はばからず声を出して泣きながら帰ってきました。子供らは茫然と手をつないで帰ってきました。

その冬、ばあちゃんと母さんは、姉と弟を連れて青森へ父さんに会いに行きました。妹の私は留守番です。上小町のおばあちゃんの所に預けられました。上小町は今の本町四丁目です。そこで西巻商店という味噌醤油雑貨の店をしていました。母さん達は、30 センチの雪の中、足袋はだしで車も通らず満員のバスにやっと乗って会いに行きました。やっと会えました。でも翌日父さんは出発です。同じ列車で上野駅へ行きました。そこで父さんは横須賀へ、ばあちゃん達は高田へ帰るのです。ばあちゃんはいつまでも父さんの列車を見て動こうとしません。母さんがやっと声をかけました。「ばあちゃん！行くよ」ばあちゃんは息子を見ていたかったのです。もう会えないかもしれません。そしてそれが息子を見た最後でした。

父さんはその後、硫黄島へ行きました。そしてアメリカ軍の上陸、攻撃に遭い日本軍全滅、父さんは死にました。ばあちゃん 70 歳、母さん 29 歳、子供 6 歳、4 歳、2 歳の春でした。ばあちゃんと母さんは信じられませんでした。ずーっと何年も何年も。

でも母さんは働かなくてはなりません。父さんの給料は貰えなくなりました。年をとったばあ

ちゃんと子供3人何とか生きなくてはなりません。長野へリンゴを仕入れに行き雁木通(がんぎどお)りの二七、四九、五一市でお菓子を並べて売りました。リヤカーごと儀明(ぎみょう)川に落ちたこともありました。パチンコや冨士屋さん等次々店を貸しました。2階の2部屋も貸しました。その頃の方とはその後4、50年間も交流のあった人達も何人もあります。

ばあちゃんはボケてしまいました。歩けないのでいざって出て行きます。昼でも夜でもいつの間にか出て行きます。母さんは忙しく、休んでいる姿を思い出せません。家に居る時は縫物(ぬいもの)をしているか台所に居ました。ばあちゃんが出て行って何度近所の方やお巡りさんにお世話になったことでしょう。その度に姉や私では帰らないので弟に「おまん！ばあちゃん連れて来て！」「いつもオレばっかり！」弟はブツブツ怒りながらも急いで迎えに行きました。「そうかね、おまさん来てくれたかね」ばあちゃんは男の弟が行くと、いつもそう言って帰って来ました。ばあちゃんは七十四歳で亡くなりました。学校で「おばあちゃん亡くなったから、すぐ帰るように」先生に言われた言葉が今も耳に残ります。小学2年でした。

今この年になって、ようやくあの時のばあちゃんの行動が理解できました。そうなのです。ばあちゃんは、息子を迎えに駅に行ったのです。死んでしまったのに理解できなかったばあちゃん。息子である父は今、忠霊塔(ちゅうれいとう)で骨のない骨箱(こつばこ)で眠っています。

大根めしの大根を食べるのが嫌で、「ばあちゃん食べて！」と言うと「そうかね、おまさんくんなるかね、ありがとね」と言って喜んで食べてくれた気のいい優しいばあちゃんでした。ばあちゃんありがとう！そして母さんご苦労様でした。母さんありがとう！